

αMプロジェクト2020-2021

## 約束の凝集

Halfway Happy

vol. 2 永田康祐 | イート

vol. 2 Kosuke Nagata: Eat

ゲストキュレーター: 長谷川新 (インディペンデントキュレーター)  
Guest Curator: Arata Hasegawa (Independent Curator)

2020年11月27日(金)～2021年3月5日(金) ※オープニングパーティ等はありません。

冬季休廊 12/20-1/8

13:00～20:00 日月祝休 入場無料

会場: gallery αM

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11 アガタ竹澤ビルB1F

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

<https://gallery-alpha.com>

協力: ANOMALY 一般財団法人東京アートアクセラレーション



Kosuke Nagata  
Eat

※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いする場合がございます。

ご来廊の際には、必ずマスクをご着用いただき、体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム e-mail: [alpha@musabi.ac.jp](mailto:alpha@musabi.ac.jp) / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム(ギャラリー不在時) tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087

αMプロジェクト2020-2021「約束の凝集」第二回は永田康祐の個展「イート」である。本展は新作の映像作品《Purée》を中心に構成される。展示タイトルや作品名からうかがえるように、今回の展覧会においては、食べること、そしてまた「口」についての問いが中心に据えられている。ここには、家庭料理をテーマにした前作《Translation Zone》（2019）から続く、永田の一貫した関心を見ることができるだろう。実際、本展では《Translation Zone》のダイジェスト版《Digest (Translation Zone)》が発表される（Digestとは「消化」も意味する）、前作の延長に位置することが示されている。このように料理への強い関心を隠さない永田であるが、そこにはもうひとつ一貫した制作態度が根を張っている。むしろその根こそが、永田の作品を単なる趣味や（レクチャー形式の作品が陥りやすい）「興味深いエピソードの羅列」から救いだしているのである。

順に見ていこう。永田はこれまで、明晰に現実を「コピー&ペースト」しているように思える事象が、実際にはさまざまな「軋轢」や「混乱」をきたしていることに注目することで作品を制作してきている。特にその最初期においては、メディア装置の不透明性や不安定さを剥き出しにする技術をそのまま作品へと昇華させており、例えば《Postproduction》（2018）では、自動化した編集ツール「スポット修復ブラシツール」が「被写体」と「写真の中の被写体」を区別できないことを利用して画面内の地と図を無効化させている。

Macのデスクトップにあらかじめ表示されている山の写真の来歴をたどり、「デスクトップ背景」を「前景化」させる《Sierra》（2017）や、オーディオガイドを用いて展示空間で鑑賞する対象物の属性やエピソードの「地と図」を振動させる《Audio Guide》（2018）などからは、永田がそれまでに研究してきた「技術」の身体化を見てとることができる。それはまた、世界において縦横無尽に引かれている境界線が確定しておらず、むしろとても恣意的に、政治的に、暫定的に決定されていることへの自覚を強くする過程でもあっただろう。「地と図」に混乱し不明瞭なイメージを生成してしまうのは、「スポット修復ブラシツール」に限らない。私たち自身もまた常に混乱し、恣意的に決断し、奇妙な描線を引いて世界を切断している。ここにひとつの反省がある。

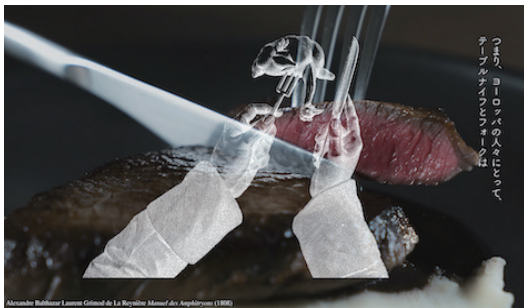
永田はその「反省」を無限に拡張させず、そこから折り返して制作へと向かう。この世界に引かれた線が恣意的であり不明瞭であると指摘することは、作品の結論では決してない。それはたんに前提である。問われているのは、それでもなお、どのような線を引きうるのかだ。《Translation Zone》において示されるのは、「翻訳」と「家庭料理」が不十分な条件下においても生活を営んでいこうとする人々の前向きな姿勢の結晶であるという事実だ。冒頭に書いた、永田の作品に根を張っている制作態度とは、この前向きさに他ならない。

新作《Purée》において、永田はタイトル通り「ピューレ」と呼ばれる料理を作りながら「主体」の範囲を考えようとしている。いくつかの時代をめぐり、ピューレが広まっていく背景にある歴史、労働、政治、現実を再編しながら、永田は主体の範囲を拡張できないかともがいている。口は身体の領域を踏み越えて存在しているのではないだろうか。そこでは、ある食事が胃に運ばれるまでの履歴をひたすらさかのぼり、際限なく拡張する倫理や責任を前に立ちすくむのではない理路が検討されている。後方ではなく、前方へと向けられた倫理。ピューレから主体の単位へ。そこには飛躍があるかもしれない。だがおそらくは、むしろ飛躍こそが要求されている。

長谷川新（インディペンデントキュレーター）

●永田康祐(ながた・こうすけ)

1990年愛知県生まれ。社会制度やメディア技術、知覚システムといった人間が物事を認識する基礎となっている要素に着目し、あるものを他のものから区別するプロセスに伴う曖昧さについてあつかった作品を制作している。主な展覧会に『あいちトリエンナーレ2019:情の時代』(愛知県美術館、2019)、『オープンスペース2018:イン・トランジション』(NTTインターコミュニケーションセンター、2018)、『第10回恵比寿映像祭:インヴィジブル』(東京都写真美術館、2018)などがある。また、主なテキストとして「Photoshop以降の写真作品:「写真装置」のソフトウェアについて」(『インスタグラムと現代視覚文化論』所収、2018)など。



永田康祐 《Purée》からのスティル (制作中)



永田康祐 《Semantic Segmentation》2019年

キュレーターズノート (2020.1.16) 長谷川新

2018年の暮れ、「αMでゲストキュレーターをしませんか」と連絡をうけて最初に考えたことは、「絶滅」についての展覧会だった。風の谷のナウシカの原作漫画を繰り返し読んでいて、タイトルは仮で「ノーマンズランド」とつけていた。それはとても暗いように見えるけれど、別に悲観的であるわけではなくて、むしろそれを避けてアートはできないんじゃないか、という中途半端にリアルな手応えに基づいたものだった。他方で、できるだけ具体的であろうとも考えていて、開場時間を13時〜20時へと変更したり、初日のアーティストトーク(とその文字起こし)をやめてカタログをもっといろんな読み方ができるようにしようとか、オリンピックシーズンの鑑賞/労働条件を鑑みて、展示はせず別の時間の使い方ができるようにしよう、と決めたりもしていた。このちぐはぐさはなんなのだろう、と自分でもよくわからなかった。でもいまははっきり書けることがある。

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまってから、むしろそこから、そこをどう折り返して、選ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

妥協を「約束の凝集(Com-Promise)」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

追記(2020.7.29)

半年前のキュレーターズノートを見返すと隔世の感があります(恥ずかしいですがそのまま再掲します)。それでも、「はっきり書ける」と書いた部分は今でもはっきり書けます。「約束の凝集」には、確信もあれば、矛盾もあります。アーティストの実践は社会と同じくらい複雑だし、社会はアートと同じくらい吹っ切れている。そういう潔さを心がけたい。でもそれ自体を見せたいわけじゃなくて、問われているのはあくまで、どう選ってくるか、です。5人のアーティストの「帰還の技術」を目撃しにきてください。